

序 文

本書は、2015年4月より2019年3月まで、4年にわたって行われた京都大学人文科学研究所の共同研究班「毛沢東に関する人文学的研究」（班長：石川禎浩）の研究成果報告論文集である。

毛沢東が世界から姿を消して、すでに40年以上が過ぎた。彼は革命中国の、否中国そのものの象徴であり、まぎれもなく20世紀世界最大のカリスマ指導者の1人だった。そしてかれの死後、中国は大きく変貌し、40年という時間以上の変化をとげた。通常、これだけの時間が流れると、その人物が如何に巨大な存在だったとしても、権威や存在感にある種の風化が起り、良くも悪くも客観的な冷めた目で評価を下すことができるものである。例えば孫文の場合、1925年に「革命未だなお成功せず」と言い残して世を去ったわけだが、その言葉が示すように、かれは生前に革命事業を完遂できず、むしろその死後に影響や存在感が長く残ったタイプの革命家である。その彼でも、死後40年経った時点（1965年）で、その関連資料のうち、公開がはばかれるようなものは、数えるほどしかなかった。とりわけ人民共和国では、偉大なる革命の先駆者として敬われてはいたが、その影は薄く、いわば国慶節の記念行事の時にだけ大きな肖像画で登場する人物、つまりは完全に過去の人だったと言っても良いだろう。「国父」として敬われた台湾でこそ、その存在感は確かに大きかったが、それ以上ではなかった。

これに対して毛沢東の場合、今日におけるその存在感は、1965年における孫文のその比ではない。かれの肖像画はなお天安門に常時掲げられているといった見やすい比較以外にも、政治腐敗や格差、地方幹部の不正への住民の抗議行動が起ると、デモや集会の旗印として掲げられるのが、筵旗ならぬ毛沢東像である。さらにはどんな脈絡なのかわからぬが、毛沢東像は反日運動のさいにも引っ張り出される。タクシーのフロントガラスに、かなりの割合で毛沢東グッズがお守りよろしくぶら下げてあることは、中国を旅した者なら誰でも知っていよう。また、文化大革命こそ公式には否定されているといいながら、毛沢東の残した中国共産党という組織は、なお現代中国を支配し続けており、「毛沢東思想」の語は最新の党規約でも13回使われている。毛沢東を指導者の師表と仰ぐ観念が、なお党指導者たちに根強いことは、習近平の挙措を見れば明らかである。

他方、目を中国国外に転じれば、そのカリスマ性が世界大のものだったと言うことも、毛沢東とそのほかの歴史人物を分かちし標である。日本では戦後、民間有志によって「毛沢東思想学院」という名の教育・文化施設がつくられた。これに限らず、毛沢東の影響を強く受けた戦後の社会運動は、決して一つや二つではない。フランス、日本ではおりから巻き起こった学生運動に毛沢東思想（マオイズム）の影響が色濃く見られ、社会運動を支える新たな原理とされた。孫文や蔣介石も世界的に知られた人ではあるが、かれらの思想が中国以外の地域で何らかの指導原理となったという事例をわたしは知らない。これに対して毛の場合は、必ずしも毛自身が明文で認可したものではないだろうが、毛沢東の思想の奉賛を謳い、それを組織名・団体名に表示（「毛沢東派」）するような共産主義結社・党派・教育機関まであらわれた。「ネパール共産党（毛沢東主義派）」しかり、1967年に設立された前述日本の「毛沢東思想学院」またしかりである。

ことほどさように、その存在感や内外への影響が顕著であり、現代中国を理解する上でもキーパーソンであるからには、この毛沢東を主題に据えた近現代史の研究班があつてしかなるべきだろう。そのように判断してこの班を発足したわけである。毛沢東にかんする研究班を発足させるにさいして、わたしは研究班の狙いを次のようにまとめて、班運営の構想とした。

1976年のその死の後、とりわけ“改革・開放”政策によって、中国が目覚ましい経済発展を遂げて以降、革命家“毛沢東”の存在は、驚くほどのスピードで風化し、その姿は皮肉にも、かれが敵視したはずの市場経済において、商品として流通し、消費されているありさまである。しかしながら、中国では、今もかれの遺産とも言うべき社会主義的な文化様式やイデオロギーがなお根強く残存している。現にそれらは、一般民衆の思考様式に影響を与え、貧富の格差を抱えつつ、なお経済発展を優先する体制にたいする異議申し立てのアイコンとなっている。他方で、中国共産党の幹部たちにとっては、その晩年の過ちを差し引いても、毛沢東は今も政治指導者たる者のロールモデルであり続け、それゆえ中国共産党史や現代史の歴史記述を強く規定していることに変わりはない。

中国史上最大の巨人と言っても過言でない毛沢東に関しては、誹謗・中傷から称賛・崇拝にいたるまで、これまで膨大な言説が積み重ねられてきた。伝記も年譜も著作集も出ており、もはや研究・評価されつくされたかに見えるが、実はその生涯には、なお解明を待つ人文的課題が山積している。人文研では、かつて1970-80年代に故竹内實教授の主宰した共同研究班で、毛沢東が取りあげられたことがあるが、資料状

序 文

況が劇的に改善された今日、往事の研究を乗り越えることは大いに可能である。本共同研究班は、政治家・革命家としての側面だけでなく、毛沢東という巨人が持っていた読書家、詩人、書家といった文人的側面や水泳・ダンスの愛好者といった運動人の側面、あるいは毛沢東に関する情報が如何にして形成・共有されたのかといったイメージ生成の側面に対しても、歴史学、文学、芸術学など人文学的見地を総動員して、新知見を産み出すことを目指す。

ただし、こう宣言して自らを鼓舞はしたものの、毛沢東研究の困難、あるいはそれがハードルの高い課題であることも、班のテーマを設定する時点である程度は懸念し、覚悟していた。ハードルの第一は、毛をめぐる蓄積されてきた膨大な量のイデオロギー的言説が存在し、かれを論ずることを難しくさせているという現実である。特に若手の研究者にとっては、晩年の思想や行動の背景をなした冷戦的思考回路とその独特の政治言語に親近感はいわゆるわきにくく、かつ俗人とも超人とも言える毛沢東の独特の世界に入っていくには、かなりの覚悟がいる。毛沢東の重要性は理解しているつもりだが、実際に自分が研究するのはちょっと……というのが、21世紀における日本の中国研究者の大勢ではないだろうか、という懸念である。

もう一つのハードルは、中国で行われてきた膨大な量の研究の存在である。著名な歴史人物を対象とした共同研究班ということで言えば、人文研ではかつて狭間直樹班長のもとで、梁啓超を主題とする研究班が組織され、国際的に見ても大きな影響を及ぼす成果をあげたが、梁啓超の場合は、その生涯で最も旺盛に執筆活動をしたのが日本亡命時期であり、かれが日本で目にした書物を探すのに、日本の資料が使えるという優位性があった。それに対して、毛の場合は、国家指導者となってからソ連に行ったことがあるだけで、旧ソ連（コミンテルン関係）のものを除けば、日本や外国にこれは、という価値ある関連資料がほとんどない。さらに、国家指導者となって後の関連文書は、公開・非公開の裁量を含め、中国共産党がそれを独占的に管理しており、内外の研究者が自由にアクセスできるような状況にはない

また、先述のように、人文研には毛沢東研究で知られる故竹内実教授がかつて在籍され、1970-80年代に現代中国にかんする共同研究班で毛沢東が取りあげられたことがあった。むろん、日本での研究には資料上の制約も多かったが、当時は中国の研究もある意味で日本以上に制約が多く、日本や欧米で集められる資料も、それなりの価値があった。だが、毛が同時代人であった当時から半世紀近くがすぎ、中国の毛沢東研究は大きく進展している。むろん、それらは中共による革命史観の枠の中で行われてきたものであるから、限界

は確かにある。だが、そこは何と言っても本家本元、特に党の歴史研究部門が資料の面で持っている優位性は圧倒的である。

以上をまとめれば、毛をめぐる研究は、一方でイデオロギーという20世紀の手垢にまみれ、かつ資料面でも中国には容易に太刀打ちできないというわけである。そうになると、我々外国の研究者はどうやって毛を研究すればよいのか。毛の生涯を少々調べて、まとめてみたところで、中国の専門家に「外国人にしては、よくやっているね」とお褒めの言葉を頂戴するのが関の山であろう。卑近なたとえをするならば、卓球の中国代表と試合をするようなものである。こちらが一生懸命に練習し、事前に秘策、奇策を準備しても、実戦では先刻承知とばかりに対応されて通用しない。結局は何ポイントかとただけで完敗、試合後に向こうさんが「ナイスゲーム」といって握手してくれる、とまあ、そんなものである。

ならばと言って、中国国内では発表できないような毛のタブーやマイナス面をことさらに取りあげて、オリジナリティを主張するか。これも卓球でいえば、中国選手は普通ラケット、こっちだけが特別なラケット、さらに卓球台に我々だけが打ってポイントになる場所がある、そんな特別ルールで試合をするようなことである。だが、まともなスポーツマンならそんな試合を望まないように、中国の研究者が知っていても言わない、言えないことを言って、独自の研究だと居直るのも気が進まない。これら諸々のことが混ざり合い、そんな毛沢東研究なら、いっそ最初から敬して遠ざけたい、そんな雰囲気がある今の日本の中国現代史研究にはあるとわたしは懸念した。

だが、毛沢東を論じることを抜きにして、現代中国がわかるだろうか。毛沢東の伝記などは、日本でも今なお時おり出版され、ゴシップ的に話題を呼ぶが、その程度のもので毛とかれの生きた時代がわかるだろうか。さらに言えば、毛をかれの生きた時代の空気や価値観、世界観と合わせて理解することは、イデオロギーの時代が遠い過去のものになりつつある今、どんどん難しくなっており、遠からず不可能になるだろう。今の時点で毛の研究をやっておかねば、次の世代は毛を研究する基本的な素地すら持たなくなってしまう。そんなことをあれこれ考え、「毛沢東に関する人文的研究」に踏み切ったのであった。

このような経緯で毛沢東研究を呼びかける檄を發したところ、幸いにして、30名ほどの「同志」が呼応してくださった。かくて、2015年4月に3年計画で發足した毛沢東研究班は、隔週一回の割合で金曜午後（2時～5時）に人文研本館3階のセミナー室4で研究例会を開催し、研究報告や情報交換の場となった。その後、班としては研究の取りまとめにもう少し時間が必要だと考え、1年延長、都合4年間に計61回の研究例会を開催した。報告者はのべ68人、毎回の例会参加者は15-20人ほどで、延べにすると参加者は約1,000人に達する。毎回おおむね1人の報告者が1～1.5時間ほど報告し、その後あらかじめ決められたコ

序 文

メンテーターが論評を加え、それを受けて報告者の応答と全体討議を行うというのが、例会のスタイルであった。それぞれの回の開催日時と報告者、報告テーマ、コメントーターといった開催記録については、『東方学報』第91-94冊（2016-2019年）の彙報欄に掲載されているほか、人文科学研究所附属現代中国研究センターのウェブサイトの関連欄 (<http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/~rcmcc/group107.htm>) に掲げてあるので、ご覧いただきたい。

本報告書に収録する15篇の論文は、すべて班員相互の査読を経たものである。研究会に参加された方の中には、諸事情によりこの論文集に寄稿されなかった方、あるいは寄稿・修正が間に合わなかった方もおられるので、研究班の終了した2019年3月時点での班員の氏名（本論集への寄稿者を除く）を以下に掲げておく。岩井茂樹、菊池一隆、川口美柚、韓燕麗、瞿艷丹、楠原俊代、谷雪妮、柴田陽一、祝世潔、鄒燦、瀬辺啓子、団陽子、比護遙、福家崇洋、三田剛史、村田雄二郎、望月直人、山崎岳、吉田豊子、李冬木、李ハンキョル（敬称略）。

先に述べたように、本共同研究班は、毛沢東の政治家・革命家以外の側面、また国外でのその影響力にも注意を払うべきだという合意のもと、詩人、書家といった文人的側面や水泳・ダンスの愛好者といった運動人の側面、あるいは毛沢東イメージの生成などの側面に対しても、新知見を産み出すことを目指した。このねらいが果たしてどの程度達成されたかについては、本書に収める15篇の論文を読んで評価していただくよりほかないが、例えば、水泳と毛沢東に関しては高嶋論文を得ることができたし、毛イメージに関しては丸田論文、小野寺論文、島田論文、そして中国国外での毛沢東の影響については、村上論文、楊論文、中村論文を収めることができた。これらを含めて、この論文集に収めた諸論考は、いずれも現在の中国で毛沢東研究といえば連想されるような定型のオーソドックスな毛沢東研究とは一線を劃するような内容であることを理解していただこう。

また、研究班の関連講演会としては、石川が2018年3月に東京での人文研主催講演会（TOKYO 漢籍 SEMINAR「中国近代の巨人とその著作——曾国藩、蔣介石、毛沢東」）で、「毛沢東——書家として、詩人として」と題して講演を行い、毛沢東研究の重要性と面白さを社会に対して広くアピールした。講演記録は、会ののちに出版された講演集（『中国近代の巨人とその著作』研文出版、2019年1月刊）に、書き起こしの論考として収録されている。同様の関連公開講演としては、研究班終了後の本年秋にも、人文科学研究所の恒例行事である市民向け公開講座「人文研アカデミー」の四週連続のセミナー「毛沢東——どんな男だったのか」を開催し、石川が先の東京と同タイトルの講演を行った（9月26日）ほか、江田憲治、丸田孝志、谷川真一の諸氏が、それぞれ以下のタイトルで講演を行った。

江田憲治「毛沢東の農村による都市の包囲戦略——淮海戦役を中心に」（10月3日）

丸田孝志「毛沢東像の成立——プロパガンダと民俗利用」(10月10日)

谷川真一「毛沢東の文革思想——ユートピアから陰謀論まで」(10月17日)

これら講演会にかんしては、東京のものには200人近い参加者、京都のそれも毎回80人ほどの参加者があり、上々の評判を得ることができた。このほか、直接に毛沢東には関係しないが、本研究班の関連する現代中国研究センターの研究会として、以下のものを主催した。

2015年5月29日 講演会 漆麟「現代絵画聯展」からみる日中戦争中におけるモダニズム美術の転換」

2015年7月31日 講演会 茅海建「従張之洞檔案看戊戌变法」

2015年11月20日 講演会 クレイグ・スミス (Craig Smith) : Chinese Asianism in the 1920s and 1930s: From Sun Yat-sen to Hu Hanmin and the International of Nationalities

2016年1月15日 講演会 李虹「河上肇与李達的馬克思主義進程」

2016年4月11日 講演会 楊瑞松「“同胞”与“眠獅”：近代中国国族想像的日本淵源」

2016年6月26日 合評会 狭間直樹『梁啓超 東アジア文明史の転換』岩波書店刊

評者：高柳信夫、吉澤誠一郎、村上衛

また、いくつか業務報告的なことを附記すれば、本研究班は人文科学研究所の実施する全国共同利用・共同研究「人文学諸領域の複合的共同研究国際拠点」の一環として、共同研究班(C班)の区分で行われたものである。またそれと同時に、この研究班は2015-2016年度の二年間は、人間文化研究機構(NIHU, 大学共同利用機関法人)と京都大学との連携研究事業(現代中国地域研究京都大学拠点)の一部として行われた。この二年間の研究班の運営にあたっては、現代中国研究センター客員准教授の武上真理子(2017年3月離任)、および同助教の森川裕貫(2015年4月着任、2018年4月離任、現関西学院大学准教授)の両氏に補佐してもらった。また、2015年以来の例会準備に関しては、同センター受け入れの郭まいか(人文学連携研究者)、望月直人(産学官連携研究員)、および瞿艶丹、李ハンキョル(以上、京都大学大学院文学研究科院生)ら諸氏のサポートを受けた。

NIHUとの連携研究事業は、10年間にわたって多くの成果をあげた後、2017年3月をもって終了し、これに伴って年間約500-600万円ほどあった研究予算がなくなった。経常的にあったその経費がなくなったことは、少なからぬ打撃であったが、それとは比べものにならないのは、この事業に伴って採用された武上真理子氏が2017年3月に任期満了で退職されたこと、そして間もなく脳梗塞で倒れ、10月にお亡くなりになったことである。

序 文

5年にわたり、研究班をはじめとする本センターの業務にたいする武上さんの献身的な働きぶりは、彼女への追悼文（『孫文研究』62号,2018年6月）で記したとおりだが、それがなければ、この報告論文集がこのような刊行されることはおろか、4年間の研究班活動そのものが順調に進行するということもなかったことだろう。武上さんの死を悼むと共に、その貢献に改めて感謝する次第である。

本書に収めるすべての論文については、本書の刊行後にそのPDF版をウェブサイト上（<http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/~rcmcc/seika.htm>）に公開する予定である。なお、本書の印刷・データ作成には、全国共同利用・共同研究「人文学諸領域の複合的共同研究国際拠点」（京都大学人文科学研究所）のプロジェクト経費（2019年度共同利用・共同研究拠点事業に係る研究成果の刊行）、および京都大学の指定国立大学法人事業である「人文・社会科学の未来形発信」の2019年度プロジェクト経費を使用させていただいた。

2019年11月24日

人文科学研究所附属現代中国研究センター

石 川 禎 浩